

1. 「ヒノヒカリ」、「朝日」の穂肥施用時期が収量、品質に及ぼす影響（情報）			
[要約] 「ヒノヒカリ」、「朝日」で穂肥を 1 回施用する場合、出穂 15 日前（幼穂長 10～20mm）までに穂肥を施用すると収量が確保でき、蛋白質含量もあまり高まらない。			
研究室名	作物研究室	連絡先	086-955-0275

[背景・ねらい]

「ヒノヒカリ」、「朝日」は本県中南部で広く作付されているが、近年の温暖化に伴い、食味や品質の低下が問題となっている。そこで、穂肥施用時期の違いが収量、品質に及ぼす影響を明らかにし、高品質、安定生産につながる施用時期を検討する。

[成果の概要・特徴]

1. 「ヒノヒカリ」、「朝日」とも、幼穂形成期は出穂 24～22 日前である。出穂 16～17 日前で幼穂長 10mm に達し、出穂 14 日前には 20～40mm と急激に伸長する（図 1）。
2. 収量は出穂 15 日前（幼穂長 10～20mm）までの施用で多いが、これより遅いと増収効果が低下する（図 2）。
3. 穂肥施用時期が遅いほど未熟粒率は低下する傾向であるが、蛋白質含量は増加する（図 3）。

以上の結果から、穂肥施用時期を遅らせると未熟粒率は低下するが、収量を確保し蛋白質含量を高めないためには、出穂 15 日前までに施用するのがよいと思われる。

[成果の活用面・留意点]

1. 窒素 3 kg/10a の穂肥を 1 回施用した場合の結果である。基肥、追肥は 2～7 kg/10a 施用した。
2. 基肥や追肥が多いと籾数が過剰になり、穂肥を遅らせても未熟粒率が低下しないことがある。
3. 「朝日」では幼穂形成期（出穂 24～22 日前）頃の穂肥は稈長が長くなりやすく、倒伏しやすい。

[具体的データ]

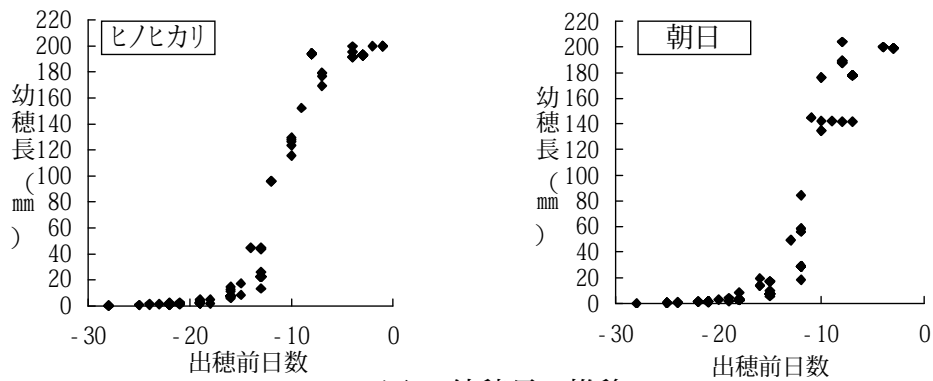


図1 幼穂長の推移

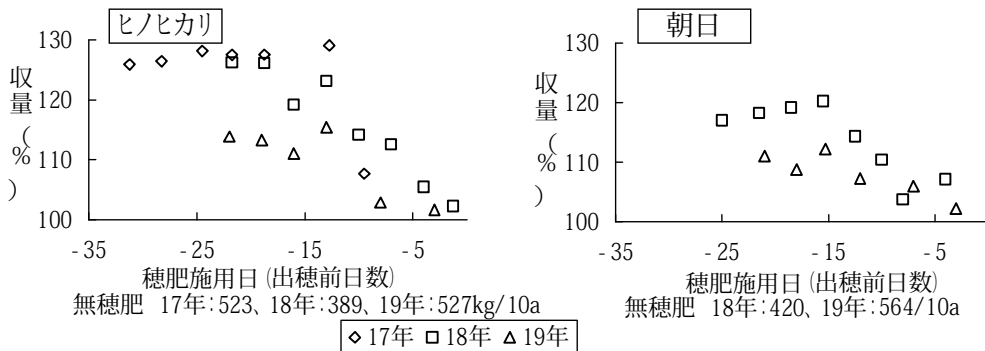


図2 穂肥時期と収量の関係
無穂肥区を100とする比で示す

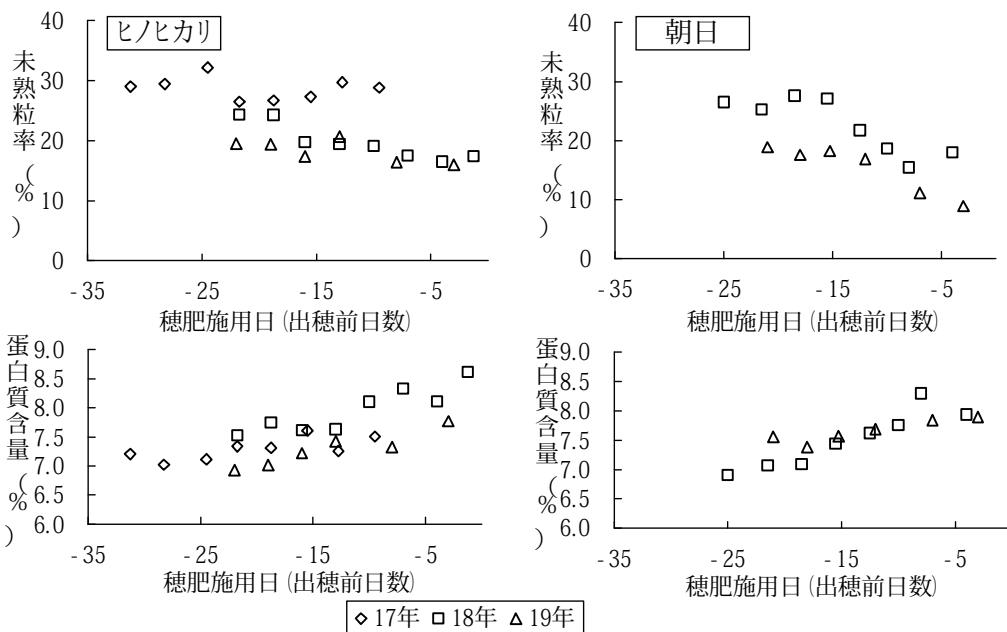


図3 穂肥時期と未熟粒率、蛋白質含量の関係

[その他]

試験研究課題・事業名：温暖化に対応した水稻「朝日」、「ヒノヒカリ」の良食味栽培技術の確立

温暖化に対応した「コシヒカリ」、「あきたこまち」の品質向上対策

予算区分：県単

研究期間：平成17～19年度